

日本天文学会 早川幸男基金による渡航報告書 *The Golden Age of Cataclysmic Variables and Related Objects*

渡航先—イタリア

期 間—2011年9月12日-17日

早川幸男基金による研究会参加費および滞在費の援助を受け、イタリアで開催された国際研究会(The Golden Age of Cataclysmic Variables and Related Objects)にて招待講演を行った。本研究会は、白色矮星連星系や激変星を対象とする歴史的なものであり、毎年かたちを変えて開催されている。私は一昨年にポスター発表、昨年に口頭発表を行い、今年はずいに招待講演を担当することができた。なかでも、今年の研究会は特に濃密である。1週間にわたり交通機関の乏しい場所にあるホテルに泊まり、朝から晩まで研究者同士が寝食を共にする。イタリアの研究会らしく、昼休みが4時間もあり、夕方の17時からセッションが新たに始まる点も印象深い。

会場は、イタリアのシチリア島に位置するパレルモ市からさらに郊外へと進み、モンデッロという街にある Splendid Hotel La Torreで行われた。私が住む米国の東海岸(ボストン)からは、乗り換えを入れて1日ほどもかかる長旅である。シチリア島ではタクシーの料金メーターを当然のごとく動かしてもらえず、なぜか交渉しだいで料金は半額近くにもなるほどであった。また、運転は非常に激しく、道を間違えた高速道路にもかかわらず後進するという荒業も見せてくれた。茶目っ気たっぷりなタクシー運転手、そしてなにより無事に旅を終えられた奇跡にまずは感謝したい。

さて、本研究会で私は「The Impact of Suzaku on the Knowledge of Cataclysmic Variables」というタイトルのもと、30分間の講演を担当した。

本講演では日本のX線天文衛星「すざく」による観測結果のレビューが求められた。そこで私は、打ち上げから約6年間にわたるすべての結果を紹介した。これらは強磁場の白色矮星連星系や矮新星、古典新星爆発など多岐にわたるものであった。さらに、私の博士論文の内容(X線による古典新星の観測的研究)を軸として、なかでも記者発表などが行われたインパクトの強い成果を取り上げた(詳しくは、天文月報2010年7月号のEUREKAを参照)。将来的な研究計画や、日本の次期X線天文衛星「ASTRO-H」の紹介も行った。これらの内容は、研究会のまとめとして最後に行われた Concluding Remarksのセッションでも大きく取り上げられた。

研究会には、世界中から100名ほど激変星の研究者が集まった。博士論文の執筆時にお世話になった共同研究者をはじめ、著名な理論家、さまざまな波長の観測家、新たに研究を始めた学生たちと、ときにはワインやエスプレッソを片手に白熱した議論を繰り広げた。また、現地パレルモの研究所に所属する他分野の研究者とも知り合いになり、今回の渡航を契機として全く新しい研究を始めることができた。これぞまさしく研究会の醍醐味といえる。

以上まとめとして、今回の研究会では博士論文の内容に即した招待講演を担当し、同内容を研究するさまざまな人々と議論をすることで、極めて有意義な海外渡航を経験できた。費用を援助いただいた早川幸男基金、日本天文学会、およびそれを支える関係者すべての方々に深く感謝したい。

武井 大 (Harvard-Smithsonian Center
for Astrophysics)